① 毎月25日発行

山と博物館

第５６巻　第１２号　２０１１年１２月２５日　　市立大町山岳博物館

大町山岳博物館 創立 60 周年記念式典　牛越市長挨拶（平成 23 年 11 月 3 日）

「市立大町山岳博物館創立60周年を迎えて」

牛越　徹

市立大町山岳博物館は昭和26年11月に誕生し、60年周年という大きな節目を迎えました。

11月3日、多くの皆様のご臨席をいただき記念式典を開催いたしました。この慶事を市民の皆様とともに心からお祝い申しあげますとともに、今日まで山岳博物館を支え、育んでいただきました皆様に、心より御礼申しあげます。

大町市は、市民参加と協働のもと、目指す将来像を「美しく豊かな自然、文化の風薫る　きらり輝くおおまち」として市政を進めております。将来像の実現のために山岳博物館が果たす役割は大きく、その使命は「山岳文化都市の形成」にほかなりません。

山岳博物館の創設時、燃えるような熱い思いで活動に奔走された方々や、支援していただいた多くの皆様の精神を決して忘れることなく、山岳文化都市宣言に謳われている「21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造」を目指して、自然と人とが共生するまちづくりに邁進することが、山岳博物館の重要な責務だと確信します。これからも地域での教育文化の向上を基軸として、独創的な調査研究や教育普及活動を進めるとともに、特色ある観光の拠点施設として幅広い活動を続けてまいります。今後も、市民の皆様とともに歩み、市民に愛され、親しまれる山岳博物館であり続けるために、更なるご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

（大町市長）

大町山岳博物館の過去・現在・未来（上）

君塚 仁彦

連載にあたって

大町山岳博物館創立60周年、市民の皆さんに心からお慶び申し上げます。戦後まもなくの経済的にも豊かとはいえない時期に設立された直営の公立博物館が、地域住民に支えられながら「還暦」を迎えること自体、現在の日本では大変貴重な出来事だからです。

『山と博物館』の今号と次号とにわたる私の文章は、2011年11月3日に行われた60周年を祝う記念式典での講演「大町山岳博物館の過去・現在・未来ー『さんぽく』への期待」をベースにしたものですが、主に、大町山岳博物館（以下「山博」）の学術的な意義という点に光を当てて内容を構成しました。市民の皆さんにはあまり馴染みではないかもしれませんが、公立博物館の存在意義が問い直されている今だからこそ、改めてその点に光を当てて話を進めたいと思います。

ご承知の通り、山博は山岳文化をメインテーマとする日本では珍しい博物館です。しかしその点にとどまらず、私が専攻している博物館学の世界では、この小さな博物館で連綿と行われてきたさまざまな調査研究活動や教育活動が高く評価されています。地方都市にある公立博物館では、その存在意義から見て国内有数の存在であることは多言を要しません。2回にわたる連載では、このような学術上の評価や、山博から学ぶ公立博物館の底力、そして魅力などについて期待を込めてお伝えできればと思います。

現在、私は、勤務先の大学で学芸員資格取得者養成を担当しています。同時に、研究活動として取り組んでいるテーマの一つが、全国の市区町村立レベルの地域博物館における学芸活動、とりわけ教育活動の研究です。それらを地域住民の視線、社会教育・生涯学習の視点で考察し、そのことを通して、地域で運営されている公立博物館の役割や存在意義を具体的に明らかにするということが仕事の一つになっています。平たく言えば、「なぜ、地域に教育研究機関としての公立博物館があるのか?」「日常生活で公立博物館がなぜ必要なのか?」という問いかけを続けること、考え続けることです。山博は、その問いかけに明快な答を出してくれる博物館の一つです。

博物館は、たまの休日に楽しみや癒しのために行く、あるいは非日常的な体験ができるレクリエーションのための場所、しかも大規模な施設であるという見方が日本では一般的です。それも事実です。しかし、博物館の数が増加し始めた1980年代以降、博物館に対する考え方にもさまざまなものが出てきました。その一つが日常生活への視点です。日本の博物館はその大半が中小規模ですが、生活に密着した中小規模の公立博物館は私たちにとって大切な存在だと思います。特に昨年は東日本大震災があり、東北各地に甚大な被害が生じましたが、今後、自然環境や文化を含めた「地域社会の記憶庫」としての公立博物館が見直され、活用され、改めてその役割が見出されてくるに違いありません。

以前より私は、博物館とその館がある地域社会との関係を考えるため、博物館だけではなく、できるだけ自分の足でその土地を歩いてきました。そして博物館の学芸員や職員の皆さん、博物館にさまざまな形で関わる地域の方々とも可能な限り交流をしながら、博物館がその地域のどのような価値を掘り起こし、それを情報化し、人びとにどのように伝えているのか、日常生活にどのように役立っているのかを考え続けています。大町そして山博も、私にその思いを強くさせてくれた事例の一つなのです。

大町山岳博物館と私

大町山岳博物館の名前を初めて知ったのは、1933年、大学で博物館学を担当されていた伊藤寿朗先生の講義を聴いたのがきっかけです。東京生まれで、青年時代までを埼玉県や千葉県で過ごした私は、高度経済成長期の典型的な衛星都市の住民でした。

山への関心は、小学生時代、南アルプスをフィールドに本格的な登山をしていた叔父に蓼科山へ連れて行ってもらったのが大きなきっかけでした。その経験を通して、子供ながら山の魅力に一気に取り憑かれたように思います。成長するにつれて山歩きから登山へと進み、高校時代には少しばかりの山道具を揃えることができ、友人と登山するようにもなりました。大町を初めて訪れたのもその頃です。

若い時には誰しも同じ経験があるかもしれませんが、その頃の私は、時間を競うようなことが登山の目的になってしまい、山麓の街や文化などには関心を持つ力がありませんでした。精神的にも幼かった私にとって、山は人びとの生活から切り離れた存在になってしまっていました。大町はあくまでも登山のための交通上の通過点であり、そこに山と文化、山の自然をテーマにする立派な博物館があるということを知りませんでしたし、知ろうともしませんでした。何とも浅はかです。

そんな私が大学の授業で大町山岳博物館の名前を知り、日本にこんな博物館があったのか!という驚きを感じましたが、それが日本の博物館史上きわめて重要な館であると聞いて、行かなくてはならないという気持ちになりました。登山が大好きな自分が山博の存在も知らなかったという恥じ入る気持ちもありました。20数年も前のことになりますが、私が最初に訪れた山博はオープンして3年後あたりの3代目博物館です。課題レポートを書くための取材に行きました。

私には、その時に見た展示の印象がとても強く残っています。山や岳の自然や人々の暮らし、登山の歴史や文化……、私にとってただ登って下るだけの存在だった山を総合的な視点で理解させてくれるうえで大きく役立ちました。附属園があって自然保護のためにカモシカやライチョウが飼育されていたのには大変驚きました。山岳博物館に動物園が付いているなんて驚きだ!博物館が自然保護活動をやっている!と、大学に戻ってやや興奮気味に友人に話した記憶があります。

その後、都内の公立博物館での勤務経験を経て、母校に戻りました。大町のことは念頭にあり続けました。なにせ、調べれば調べるほど、当時の博物館学の書物で山博を取り上げていないものがほとんど無かったからです。その後、地域博物館に関心を持つ学生に

恵まれ、自主ゼミ活動の一環として山博との関わりを持たせていただくことになります。それ以降、草創期の功労者の方々への聞き取り調査や博物館や大町公民館に残されていた博物館設立・運営に関する膨大な文書資料などの調査をさせていただくことになったのです。おそらく草創期からのこれほど大量の「ミュージアム・ドキュメンテーション」を保存している博物館は国内では極めて珍しいか、他には無いと思われます。いずれは大町市の文化財になるようなものが出てくると思われますが、私たちはそのうち約1000点を目録にいたしました。何人もの学生が大町でお世話になりました。最後に1枚の写真をお見せしたいと思いますが、調査メンバーの多くは博物館学芸員としての道を進み、現場で活躍しています。山博へのお祝いの気持ちとともに、大町市、館員の皆様への感謝の気持ちで連載を書かせていただきます。

大町公民館資料収蔵室での調査風景

貴重な公民館・山博の記録資料が大量に保管されている

大町山岳博物館に対する学術的評価

2011年は「博物館法」が制定されて60年目にあたる年でした。戦後間もない当時の日本の経済・社会状況ですので、法制定の主眼は公立博物館の設置促進にありました。戦前にも法制定の動きはありましたが、実際に法律ができたのは戦後です。博物館関係者の法制定への熱意は強く、それが背景にありましたが、法隆寺金堂の炎上という不幸な事件がきっかけで文化財保護法ができたことも影響しました。

博物館法は、博物館を支える日本で最初の近代法であります。制定当時、さまざまな意見はありましたし、それが現在まで尾を引いていますが、特に、教育基本法・社会教育法を母法にした「教育法」の一環として位置づけられ、博物館が公民館・図書館とともに「社会教育機関の3本柱」として位置づけられたのが他国に類例を見ない日本の博物館行政の特色であります。

大町山岳博物館は、1951(昭和26)年、博物館法制定の年に設立された地方都市における公立博物館のパイオニア的な存在としても知られています。博物館法の公布が12月1日。大町山岳博物館の創設開館が11月1日ですので、実際には博物館法よりも1カ月も早く、当時の人口17000人の大町に近代博物館としての山博が設立されたことになります。博物館学を総合的に取り扱う研究書で、山博に触れないものは余りありません。博物館学という領域において山博はそれほど有名な館です。その位置づけられ方、評価のされ方にはいくつかの観点があります。大きく分けると以下のようになります。

① 地域の青年を中心に公民館を核とした社会教育活動としての博物館設立という側面
② 地方の個性的な自然史博物館として評価する、特に、自然保護のための調査活動とライチョウ・カモシカの飼育活動への注目
③ 日本唯一の総合的な山岳博物館として、山岳文化を取り扱う国内有数のパイオニア的な博物館としての側面
④ 山岳博物館を中核に「博物館の街づくり」「博物館都市構想」をエコミュージアム的(生態環境博物館)な思想や観光事業の側面を含めて発信している先進事例としての評価

まず①ですが、先に紹介した博物館学研究者である伊藤寿朗先生をはじめとして、社会教育機関としての博物館を重視する研究者は、「地域の青年を中心に公民館を核とした社会教育活動が、町長の協力のもとに町当局をも動かして生まれた」という点を高く評価します。特に、戦後間もない時期に、公民館を舞台とする青年団活動と博物館設立運動が、自然や山岳文化をテーマに地域文化をはぐくむ形で設立・展開されたことに大きな評価を与えています。

戦後の地方都市に作られた特徴的な博物館としては、大町をはじめとして、ごく少数ながらいくつかの事例があります。長野県内では大町よりやや時期は遅れますが、上田市民文化懇談会による上田市立博物館建設運動が有名です。山博と共に戦後の社会教育史・博物館史上画期的なものと言われています。少数の人びとの情熱的な運動から一定の市民的

な広がりを持った運動として展開しましたが、市民から広範な支持を得られず、うまくいかなかったようです。

次に②と③を評価の軸とする考え方ですが、これは自然科学系の研究者・博物館関係者に多く見られます。代表的な博物館学研究者の一人でもある、千地万造先生のご著書『自然史博物館―人と自然の共生をめざして』（八坂書房、1998年）という本では、山博について次のように書かれています。

> 糸魚川―静岡構造線にそって西側の地塊が上昇し、今日見られる日本アルプスの成長したのは第四紀に入ってからの新しい造山運動によるもので、今もなおその運動は続いている。市立大町山岳博物館はわが国唯一の山岳博物館であり、日本アルプスの自然についての調査研究を市民とともに活発に続けながら、自然資料や登山の歴史を展示している。この博物館のすばらしい調査研究の一つに「ライチョウの生態調査」がある。付属生態園ではニホンカモシカをはじめ、日本アルプスの生物が飼育されている。

また、名古屋大学教授であられた糸魚川淳二先生は、著書『日本の自然史博物館』（東京大学出版会、1993年）の中で、大町山岳博物館についてこのように述べています。②③の視点と④の視点、つまり、山岳博物館を中核に「博物館の街づくり」「博物館都市構想」をエコミュージアム的（生態環境博物館）な思想や観光事業の側面を含めて発信している先進事例としての評価、という点を併せ持った評価です。

> 戦後の混乱がまだ十分に治まっていない1950年代の初め、公民館の青年部に集まっていた若者が中心となって博物館づくりがスタートした。多くの市民の協力を得て博物館が実現した。博物館を育て充実させてゆくことは引き続いて行われ、二度、三度の改装・新装に表れているとおりである。大町市の顔ともいえる館だろう。（中略）この博物館には2つの「見せるもの」がある。1つは本館の裏にある付属園である。特別天然記念物のライチョウとニホンカモシカをはじめ、北アルプスにすむ小動物が飼育されている。またコマクサなどの高山植物も栽培されていて、北アルプスの自然をそのまま楽しむことができる。これはこの博物館にふさわしいやり方である。他の1つは、3階展望室からの北アルプスの展望である。自然のつくり出す雄大な風景はそのまま優れた展示になっている。この2つの展示は、人間がどんなに努力しても自然そのものにはかなわないことを示している。

さらに糸魚川先生は、山博草創期メンバーの一人であり、当時、東山低山帯野外博物館の内山慎三先生が提唱された「博物館都市構想」を高く評価されています。山岳博物館を核として、7つの博物館を、大町市全体を博物館として機能させるためにネットワーク化させる。ちょうど私が大町に調査に入っていたころ、内山先生にも長時間お話をうかがう機会があり、草創期の山博や「アルプス博物館都市」の構想をお聞きする機会がありましたが、先生が数年前にお亡くなりになられたことは誠に残念です。阿部酉与先生からも長時間お話を窺いましたが、亡くなられたとお聞きしました。草創期のメンバーが次々と亡くなられていることには寂しさを感じます。

内山先生は、今からちょうど10年前、2001年の10月13日に開催された「大町山岳博物館創立50周年記念式典」で記念講演をされました。私はそれをフロアーから拝聴しておりました。先生は「大町市における山博の役割」というテーマで力強く話をされました。「大町固有の文化、それは山岳文化です。北アルプスの自然と山岳文化を中心とする大町市の博物館都市構想は、エコミュージアムの考え方と全く同質であることに気付いた」と述べておられました。そしてその構想は、山博に関わった学芸員や何人かの人びとによって、すでに草創期において発想されていたと言うのです。

1980年代後半から1990年代にかけて日本に紹介されたフランスの博物館学者、アンリ・リビエールの「エコミュゼ」の構想。それよりも早く、日本の一地方都市である大町が、山博を中心に羽田健三先生が主導された「針ノ木自然園」や海川庄一先生が主張されていた「木崎湖を中心とする水禽園」構想などを持ち、さらには、市街部のいくつかの博物館を組み合わせた総合的な博物館都市構想を持ちえたこと。それはまさに大町市固有の博物館を中核とする「山岳文化資産」であるといってもよいかと思います。しかもそれが机上だけの議論ではなく、現実の社会教育や観光産業、街づくりとも切り結んでいたことは大変重要な事実であると思われます。その構想は、内山先生によって「アルプス博物館都市への実験」という論文にまとめられ『市立大町山岳博物館40年の歩み』にも掲載されています。

内山先生は記念講演で、「山博は、もっと館の外に出て、現地に立って、大町市の自然環境保全のため、政策提言をすべきである」とも述べられていました。公立博物館も行政機関の一つですから、直接的に政策提案や問題解決という場面を作り出すことは難しいのかもしれません。しかし内山先生としてはそこを打破し、よりアクティブに動き、行政や地域住民に提言し続ける博物館像を考えられていたのだと思います。公立博物館のあり方として傾聴に値する方向性だと考えます。

山博に対するこれらの動きを見ると、そこには常に動態的な博物館構想が存在していることが指摘できます。それを構想し支える人々がいました。大町そして山博は静態的ではないのです。市民と共に行われてきた自然保護のための調査活動などが評価されるのもその一端です。現時点で考えると、草創期から先進的な考え方を持って活動を展開していた山博は、博物館学研究の中で、存在そのものや価値をこれまで以上に再発見され、評価されるべきだと私は考えています。＜続く＞

（東京学芸大学教授）

山と博物館　第56巻　第12号
二〇一一年十二月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二一―二二二二
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三二九三

この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。